

予科時代の回想（1）

「二一六区隊の回想」より転載

秋元喜弘 予科21-6

（各務原市）航空8-1

入校直後

陸軍予科士官学校の入校式は昭和19年3月6日であったが3月11日に引率外出があり、宮城遙拝、靖国神社・明治神宮参拝があった。軍服を着てはじめての外出であったが、なれない軍靴で足にマメをつくり、これがその後かなりの期間治らず術科で苦労した。軍人出身の太田君が「マメができたときは糸にすみをつけ、針でマメをつぶしてその糸をとおすとよい」と教えてくれた。

3月17日、59期航空生徒卒業式。梨本宮守正王殿下台臨。また卒業式に軍楽隊がきて奏樂することを知った。

3月21日、初めての外出。みな喜び勇んだが服がいわゆる板につかず、歩いていてよく帽子をとばし弱ったものである。また大泉学園から朝霞までこんなに遠かったか、が実感であった。

4月上旬某日曜日、6区隊全員で村山・山口貯水池まで自転車行軍。当日は時折雨の降るあいにくの天気であったが、久方ぶりに外界の空気に触れることができた。

59期生 4月中下旬頃、59期地上の直突をくらすことが多くなった。これは先に卒業した59期の航空が修武台で58期にしこたまやられ、外出で振武台にきてこぼ

し、60期を甘やかすな、といったのが引金となっただけらしい。早速、某夜、高木庄吉先輩が「ボヤボヤしている者は突き飛ばすぞ」と演説し、各所で激しく直突が行われた。

4月29日の天長節に代々木練兵場で観兵式の陪観。このとき将校生徒としての感激を新たにした者も多かったであろう。その後「感激」という題の作文でほとんどの者がこのときのことを記していた。往路は武蔵野線・省電、帰りは各個で点呼外出であったことを思い出す。

5月末、59期が野営演習にでかけ吉田さんだけが残ったが上級生のいないのはこんなにのんびりしたものか、とつくづく思った。59期は野営から帰ったのち6月から略帽使用となり、特に週番士官から欠礼に注意せよと達しがあったが、早速「高木庄吉」につかまっていた者がいた。

5月25日、同期生会発足。この日、中隊対抗相撲大会があり六区隊は1中隊六区隊と個別あたり制で勝つ。この頃と前後してと思うが田村区隊長より突然、御勅諭後段を謹書せよとの命あり、誤記のない者が1名もおらず全員きつく叱責された。また7月7日中隊対抗の御親閲道路長距離継走も行われた。阿形君が大いに頑張り先頭でゴールに入ったが、それ以後体調をくずして入校当時の元気がなくなり淋しい限りであった。

吉川君の死 第九区隊吉川光義君は入校後間もなく入院したが、7月21日に亡くなり、中隊全員霊に参りに病院へ赴いた。その帰途激しい雷雨に見まわれ、ずぶ濡れとなり加えて長時間停電した。その日の夕食、いつもと変わった飯の味にみな首をかしげて

いた。食後週番士官がたち上がり全員にひと言。「今日の飯をどう思ったか。午後から停電で水が使用できず、前日皆が入浴した風呂の水で炊いたものである」。戦場では泥水で炊きさんがあたり前かもしれないが、またとないよい体験であったのかもしれない。

8月初めから沼津へ遊泳演習に出かける。予科生活でもっとも楽しい2週間であり各自思い出も多かったことであろう。遊泳の合い間に相撲・騎馬戦等があり、喜多さん指揮の東軍が高木さん指揮の西軍を破った。夏期休暇は2週間あり、帰校後区隊長交替の話があって9月1日より米田中尉が第六区隊長となった。田村大尉は10月中旬比島に向ったが、最後の区隊会が東柔道場で行われた。

10月13日、59期地上の卒業式があり、生徒会内の入替で六区隊は第十一、十二寝室、西自習室に移動した。その数日後に外出があったが、これが軍帽を着用した最後の外出となった。

米田区隊長時代の最大の行事は何といっても映画「将校生徒の手記」の撮影であり、主演の天野君ばかりでなく六区隊はその中心的存在となった。しかし天野君はこのときの十二階段の飛降り足で足をくじき、その後入院加療するようになったのは気の毒であった。

また、この頃20km行軍があった。予士校より大泉学園、杉並を経て世田谷まで完全軍装で行軍したが、イザ目的地が近くなったとき「かけ足」をやらされたのにはまいった。

11月上旬より2週間新潟県関山に野営演習にでかけたが、関山の寒いことには驚

かされ、とくに飯倉を洗う谷川の水は手が切れるように冷たかった。演習地は戦後の開拓により多くは農地となり高原野菜が生産されている。ナマコ山・ヒバリ山などの名もなつかしい。なお私は野営の際、軽機関銃の弾倉底板を折損し営倉入りを覚悟したが、演習中の出来事として毀損届の提出だけで済んだ。

11月24日、東京地方初空襲、このとき以来B29の来攻しばしばで予士校も防空体制を強化したが、米田大尉はとくに中隊の防空係将校に任せられ、心身ともにその負担も大きかったものと察している。

12月のいつであったか、同期生会歌が大講堂で発表され、壇上の音楽学校生徒(彼等がはじめに歌ってくれた)の黒いつめえり服が印象的であった。

この頃、終夜演習が行われた。場所は西練兵場からさらに西方へ進んだ雑木林の付近で、夕方天幕を張り飯盒炊きをした。このときは2人一組で飯と汁をつくり、飯に汁をかけ凍える手でそれを抱き、飯盒に顔をつっこむようにして食べたが、その美味しかったこと今でも忘れられない。食事後すぐに天幕はたたまれ、一晩中そこらを歩きつづけたが睡気は夜中より明け方にくるもので、東の空が白みかけたころが最も眠りそうになった。ふと眼を大きくあけると前を歩いている者の背のうに見る見る白く霜がおりてゆくのが見えた。

12月31日より1月3日まで、東京付近のものは外泊を許可される。

61期生 2月上旬、61期乙入校、一次生徒が出たあととはいえ、それ以上の人数を収容するのであるから寝室だけでは足らず、空き倉庫のようなところにも寝台をお

いて起居した。自習室もあふれんばかりで航空二次は机もあたらず、長机の上に教程・手法を積み重ねた状態で十分な整理もできず、身の入った勉強などとてもできなかった。また燃料がないので部屋は冷え切っており、入浴の当番日でないときにひそかに浴場へ入りこむいわゆる“挺身斬込み”により暖をとるのが流行ったのもこの頃である。なお被服が不足のため乙生徒には外出用(上装)衣袴は配分されず、我々航空二次が卒業したあと、その上装が貸与されたのである。物資の不足はこの頃振武台でもはっきりとあらわれ、甲生徒の銃剣の鞘は木製であった。(次号に続く)

[本稿は、伊藤啓司(予科21-6, 歩兵5-3)著「六十期生の一人としての交流」平成19年3月発行、の中の一節、秋元喜弘投稿「二一六区隊の回想」の抜粋を転載したものである。この回想録にはよくもこんなことまで覚えているな!と感心するほど当時の状況や交友関係が詳しく綴られている。誌面の関係でそのごく一部を紹介した。(編集子)]

秩父平成19年7月 96号

予科時代の回想(2)

「二一六区隊の回想」より転載

秋元喜弘 予科21-6
(各務原市) 航空8-1

航空兵科決定のころ

20年1月下旬、航空・地上の区分の発

表があり、六区隊の多くは航空兵科に進む。六区隊で一次は加賀谷君だけであり、彼が航空生徒代表として中隊長に申告をした。またこのとき以来一次を除く60期は七、八区隊に編成替えとなった。

航空一次、二次のわけ方については戦後いまになっても種々の議論があるが21中隊の場合はまことに簡単明瞭、六区隊は加賀屋君を除きすべて二次、七区隊は半々、八区隊はごく一部(榊・加藤)を除き一次、九区隊は全員一次、十区隊は平山・安岡を除きすべて二次、であった。またこれはひねくれた見方かもしれないが六区隊を除き各区隊長に目をかけられているものの多くは地上に残った。航空主兵の思想は最後まで陸軍にはなかったのであろうか。

何となく一次の者が多少の優越感をもって修武台に向かったのち、残された二次の者の希望は卒業時の休暇が与えられるか否かにかかっていた(一次は二次より半年早く任官する、そのかわり二次には休暇が与えられる、のウワサであった)が、当初はその可能性について五分五分、その後次第に否定のウワサが有力となり、この頃某夜夕食時に週番士官?(だったかどうか覚えていない)が最近の感想を述べよといったとき生田君が「軍歌にも、“国を思うの真心は家をもいかで忘るべき”とあるではないか…」と言ったときには期せずして万雷の拍手がおこったが、その後この発言が区隊長室で問題としてとりあげられているらしい、と伝えきき、つまらぬことが話題となる時代になったのか、との感を深くした。

文官教官

その頃第一教授班(八区隊となってから

2コ教授班編成となった)物理担当の柴田教官が齒に衣をきせず「武官連中にロクな者がいないからこんな負け戦になってしまったんだ。精神教育だけでは戦には勝てん。科学技術を重視しなければいけない」と言い、また区隊長の用事で遅れたことをさも当たり前のような顔をして講堂に入ってきた生徒を叱責している。戦時中とはいえ何となく武官が文官をバカにしたような、学問をおろそかにした気分が振武台上なきにしもあらず、某区隊長が課業見学中区隊員に話しかけ、教官から「あなたは区隊長ですか。私の授業のときは勝手に生徒に口をきかないで下さい」といわれたとか。そういえば教授部課業中六区隊の某君に呼びだしをかける連絡文がきたこともあり、一瞬教官の顔は硬わばったが「よろしい、〇〇は中隊へもどれ」と声をかけた。

何となくすっきりしないことであり、生徒隊関係のことで取調べるのであれば教練・武技の時間などに行うのが筋、というものであろう。

陸軍三長官の特別配慮 3月のいつであったか、食糧不足の振武台で降ってわいたようにある夜夕食時にしる粉が食卓をにぎわした。週番士官より陸軍三長官(参謀総長・陸軍大臣・教育総監)より特に予科士官学校生徒のために、と戴いたものである、と説明された。普通の食時プラスしる粉があるので、その夜皆満腹したことはいう迄もない。事務室の前を通ったら「どうだ、もっと食わないか」「いや、もうとても食えません」との会話が聞くとはなしに聞こえてきた。

電気工学の時間、教官がアメリカの謀略放送を聞かせてくれた。受信機は卓上の実習

用5球スーパーヘテロダインである。テーマ音楽は日華事変勃発当時の「雲湧き上るこの朝(あした)、旭日のもと敢然と、正義に起てり大日本、とれようちょうの銃と剣(進軍の歌、昭和12年陸軍省選定)」であり、当時日の出の勢いであった日本と、今の落日おおうべくもないみじめな日本の現状とを対比して、聞く者の感慨を深からしめるにはまことに適した音楽であった。放送の内容は、往時の日本は豊かであったが、いまは崩壊寸前である、今からでも遅くはないから銃を捨てよ、がその概要で、これは敵のデマ宣伝であるから諸君はこのようなものを信じてはならない、と技術中尉である教官は結んだ。

航空兵科卒業式

3月23日、卒業証書授与に先立って岡田君が双手軍刀術台覧の栄に浴した。台覧作業として竹下君、石川君ほかに数名が事前に教授部課業にかかわる作品を提出しており、また御前授業は各中隊より1名が選出され、大講堂で国漢中教官指導のもと古事記の一節にもとづいてとり行われた。

式後西生徒食堂で会食。久方ぶりに紅白の饅頭にお目にかかる。軍楽隊が厳かに、感慨深く校歌「太平洋の波の上…」を演奏するうちに食時がはじまった。航空一次はその日のうちに修武台に帰校する。3月24日は校長(牟田口中将)の特別の計らいで航空二次に外出が許可された。航士の服が事前に予士校に送られてきて卒業式後にそれに着替えたのである。

3月25日には航士より引率のため週番士官が来校、航士の編成による1中隊より建制順序に予士校をあとにした。8中隊は

殿であり正門近くになり歩調をとり頭右をしたが、そこには各中隊の区隊長がおられ、米田、木村両大尉が大声で「おお、秋元、頑張れ」と激励してくれた。（完）

[本稿は、伊藤啓司（予科21-6，歩兵5-3）著「六十期生の一人としての交流」平成19年3月発行、の中の一節、秋元喜弘投稿「二一六区隊の回想」の抜粋を転載したものである。（編集子）]